

# フランス語学習者の発話に見られる社会言語学的特徴

フランス語、ポルトガル語、日本語、トルコ語の対照研究分析  
第2回研究会「中間言語における諸問題(1)」  
2016年12月17日@東京外国語大学  
近藤野里(名古屋外国語大学)

# 始めに

- L2における社会言語学的能力
  - « the capacity to recognize and produce socially appropriate speech in contexte » (Lyster, 1994)  
(「コンテキストに応じて社会的に適切なスピーチに気づき、産出する能力」)
  - 日本人フランス語学習者の発話自体への(社会言語学的)研究はそれほど多くはない。
    - 語彙に関する研究: 杉山(2011, 2013)
    - 発音に関する研究: 近藤&川口(2009), 近藤(2010), Detey *et al* (2015)

# 始めに

- 本発表では日本人フランス語学習者の発話を対象に以下の項目の頻度を観察する。

- (1) 否定の副詞neの脱落
- (2) 人称代名詞il, ilsにおける/l/の脱落
- (3) c'est, c'étaitのリエゾンの実現

# 目次

- 先行研究について
- コーパスについて
- 分析
- 考察

# 先行研究

## neの脱落について

- Je parle français. (私はフランス語を話します。)



- Je **ne** parle **pas** français. (私はフランス語を話しません。)

→ Je ~~ne~~ parle **pas** français.

# 先行研究

## (1) neの脱落について

- ネイティブスピーカーの発話における特徴  
(cf. Dewaele, 2004)

	formal	informal
Ashby (1981)	40%	61%
Ashby (2001)	50%	88.6%
Armstrong (2002)	97.1%	98.9%

# 先行研究

## (1) neの脱落について

- ネイティブスピーカーの発話における特徴  
(cf. Dewaele, 2004)

	formal	informal
Ashby (1981)	40%	61%
Ashby (2001)	50%	88.6%
Armstrong (2002)	97.1%	98.9%

11～12歳、16～19歳の若者の発話におけるneの脱落の割合

# 先行研究

## (1) neの脱落について

- L2での脱落頻度の特徴(Dewaele & Regan, 2002)
  - ベルギーのオランダ語話者の大学生27人(18才~21才)
  - 発話コンテキストの違い:  
12.2% (formal) vs 15.4% (informal) 有意差なし
  - フランス語母語話者とのやり取りの多さ:  
17% (日常的) vs 7.3% (教室のみ) 有意差あり

# 先行研究

## (2) /l/の脱落

- ll y a [ilja] → [ija], [ja]
- ll faut [ilfo] → [ifo]

先行研究では、3人称の人称代名詞il ([il]), ils([il]), elle ([ɛl]), elles([ɛl])における/l/の脱落が観察されている。

# 先行研究 /I/の脱落

Cf. Howard *et al* (2006):

- カナダのフランス語
  - Poplack & Walker (1986) : il (非人称)=100%
  - Sankoff & Cedergren (1976) : il (非人称)=98%
- フランスのフランス語
  - Ashby (1984): il (非人称)=88%

# 先行研究 /l/の脱落

- L2における/l/の脱落頻度 (Howard *et al*, 2006) :

フランス語圏への留学経験なし: 6%

フランス語圏への留学経験あり: 33%

# 先行研究 /I/の脱落

- L2の特徴

Howard *et al* (2006) :

	/I/の脱落の割合
il (非人称)	45%
il (人称代名詞)	20%
ils, elles	29%
elle	6%

# 先行研究

## リエゾンの実現

- リエゾン: 発音されない語末の子音字が後続する語の語頭母音とともに発音される。

**C'est** la maison de Pierre. (これはピエールの家だ)

[selamezɔ̃dəpjɛr]

**C'est une** pomme. (これはリンゴだ)

[setynpɔ̃m]

# 先行研究

## リエゾンの実現

- リエゾンの実現コンテキスト: 義務的、**選択的**、禁止的
- 例えば、  
être動詞三人称単数形*est*の後のリエゾン実現率 = **43.87%**  
(Mallet, 2008:283)

# 先行研究 リエゾンの実現

- フランス語の教科書では？

教科書の音声コーパス：

c'est + =100% (16/16例) (近藤, 2012)

# 先行研究

## リエゾンの実現

- フランス語の教科書では？

教科書の音声コーパス：

c'est + =100% (16/16例) (cf. 近藤, 2012)

つまり、特に初級学習者が触れるフランス語では、このリエゾンコンテキストに限定すると、リエゾンの実現率がかなり高い。

# コーパスについて

- 2010年東京外国語大学での録音（インタビューと自由会話）
  - 「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(基盤研究A)
- インフォーマント: 11名 (学部3年生～大学院生)
- 年齢: 21歳～30代
- フランス語学習期間: 3年～10年以上
- フランス語圏への留学経験: 留学経験あり(3名) なし(8名)

# 分析

(1) neの脱落の頻度

(2) /l/の脱落の頻度

(3) c'est, c'étaitのリエゾン

# (1) neの脱落 (L2)

	L2
ne の実現	103
neの脱落	101
脱落の頻度	49.51% (101/204)

脱落の頻度 : 0% ~ 84.62%

84.62% = 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つ  
インフォーマント

留学経験あり vs 留学経験なし

# (1) neの脱落 (L2)

	L2
ne の実現	103
neの脱落	101
脱落の%	49.51% (101/204)

脱落の%: 0% ~ 84.62%

84.62% = 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つ  
インフォーマント

留学経験あり vs 留学経験なし

# (1) neの脱落 (L2)

	L2
ne の実現	103
neの脱落	101
脱落の%	49.51% (101/204)

脱落の%: 0% ~ 84.62%

84.62% = 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つインフォーマント



留学経験あり vs 留学経験なし

# (1) neの脱落 (L2)

	留学経験なし(8人)	留学経験あり(3人)
neの実現	74.52% (79/106)	24.48% (24/98)
neの脱落	25.47% (27/106)	75.51% (74/98)

留学経験があるインフォーマントの発話において、neの脱落頻度が高い。  
(有意差あり、 $p < 0.05$ )

# (1) neの脱落 (L2)

	インタビュー	自由会話
ne の実現	50.96% (53/104)	53.70% (58/108)
neの脱落	49.04% (51/104)	46.34% (50/108)

- (1) formalおよびinformalな発話コンテキストで類似している？(有意差なし)⇒ formalとinformalのコンテキストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。
- (2) インタビューがformalなコンテキストとして捉えられていない可能性もある。

# (1) neの脱落 (L2)

	インタビュー	自由会話
ne の実現	50.96% (53/104)	53.70% (58/108)
neの脱落	49.04% (51/104)	46.34% (50/108)

- (1) formalおよびinformalな発話コンテキストで類似している？(有意差なし)⇒ formalとinformalのコンテキストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。
- (2) インタビューがformalなコンテキストとして捉えられていない可能性もある。

# (1) neの脱落 (L2)

	インタビュー	自由会話
ne の実現	50.96% (53/104)	53.70% (58/108)
neの脱落	49.04% (51/104)	46.34% (50/108)

- (1) formalおよびinformalな発話コンテキストで類似している？(有意差なし)⇒ formalとinformalのコンテキストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。
- (2) インタビューがformalなコンテキストとして捉えられていない可能性もある。

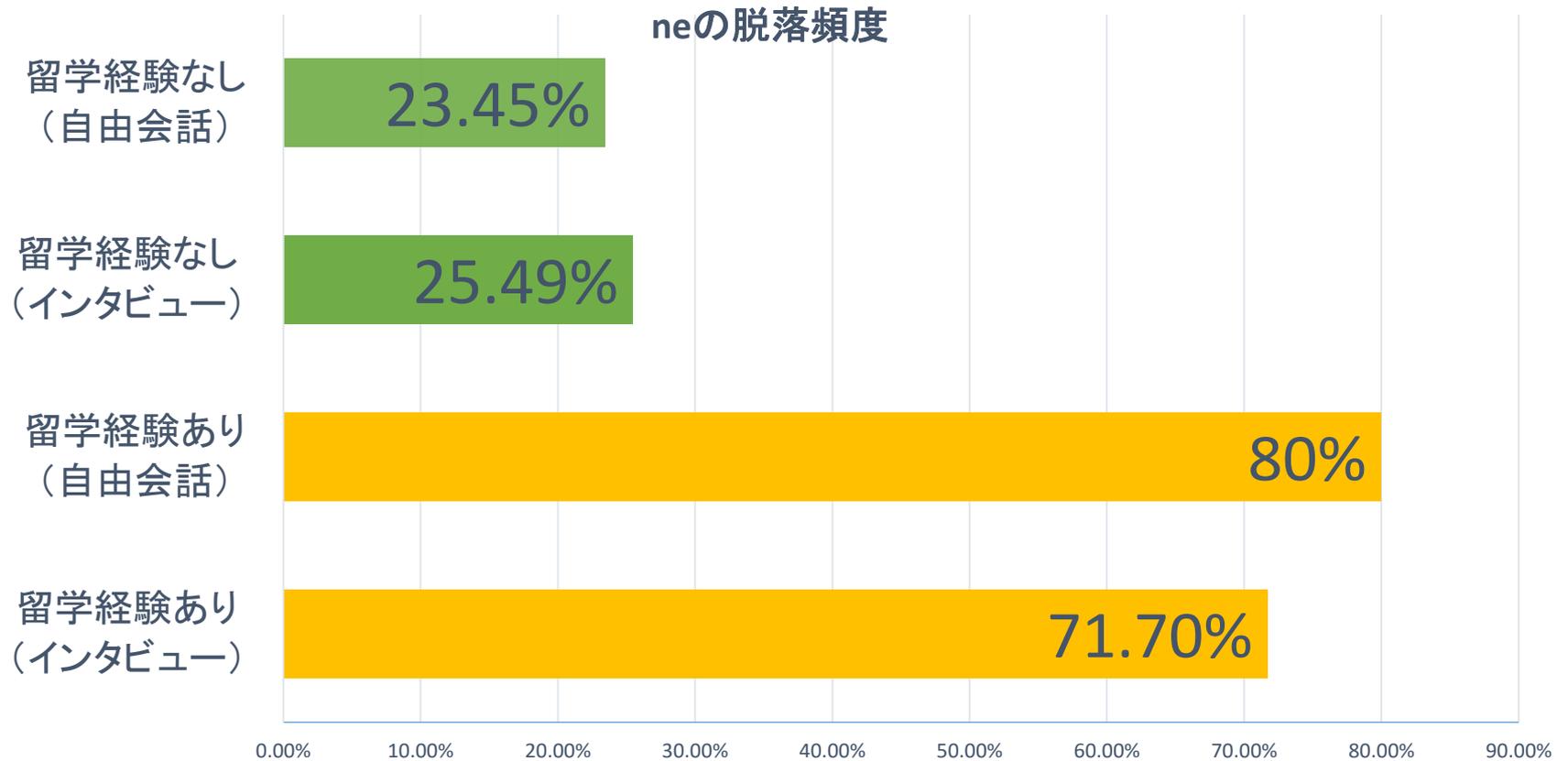
# (1) neの脱落 (L2)

formalとinformalのコンテクストに応じて、脱落の有無が調整されていないのであれば、



留学経験の差はformalとinformalの脱落頻度の違いに影響する？

# (1) neの脱落 (L2)



# (1) neの脱落 (L2)

- 留学経験があるインフォーマントの発話では、neの脱落頻度が高い。
- formalとinformalの違いで、脱落の頻度に変化はほとんどない。もしくは、インタビューと自由会話にformalとinformalを使い分ける必要性がないと判断されている可能性もある。
- « je sais pas », « il y a pas »などneが脱落した形に固定している場合もある。

## (2) /l/の脱落

	L2
/l/ の実現	186
/l/の脱落	55
脱落の%	22.82% (55/241)

脱落の%: 0% ~ 72.73%

72.73% → 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つインフォーマント  
留学経験なしvs 留学経験なし

## (2) /l/の脱落

	L2
/l/ の実現	186
/l/の脱落	55
脱落の%	22.82% (55/241)

脱落の%: 0% ~ 72.73%

72.73% → 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つインフォーマント  
留学経験なし vs 留学経験なし

## (2) /l/の脱落

	L2
/l/ の実現	186
/l/の脱落	55
脱落の%	22.82% (55/241)

脱落の%: 0% ~ 72.73%

72.73% → 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つインフォーマント



留学経験あり vs 留学経験なし

## (2) /l/の脱落

	留学経験なし(8人)	留学経験あり(3人)
/l/ の実現	86.71% (124/143)	59.57% (56/94)
/l/の脱落	13.29% (19/143)	40.03% (38/94)

留学経験があるインフォーマントでは、/l/の脱落頻度が高い。(有意差あり、 $p < 0.05$ )

## (2) /l/の脱落

	インタビュー	自由会話
/l/ の実現	71.87% (92/128)	83.18% (94/113)
/l/の脱落	28.13% (36/128)	16.81% (19/113)

本来 “informal” であるとも考えられる /l/ の脱落が formal なインタビューにおいてより高い数値 (=28.13%) が観察される。



formal と informal のコンテクストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。

## (2) /l/の脱落

	インタビュー	自由会話
/l/の実現	71.87% (92/128)	83.18% (94/113)
/l/の脱落	28.13% (36/128)	16.81% (19/113)

インタビューと自由会話の脱落頻度に有意差はない。



(1) formalとinformalのコンテクストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。

(2) もしくはこの2つの発話コンテクストにformalとinformalの違いがない。

## (2) /l/の脱落

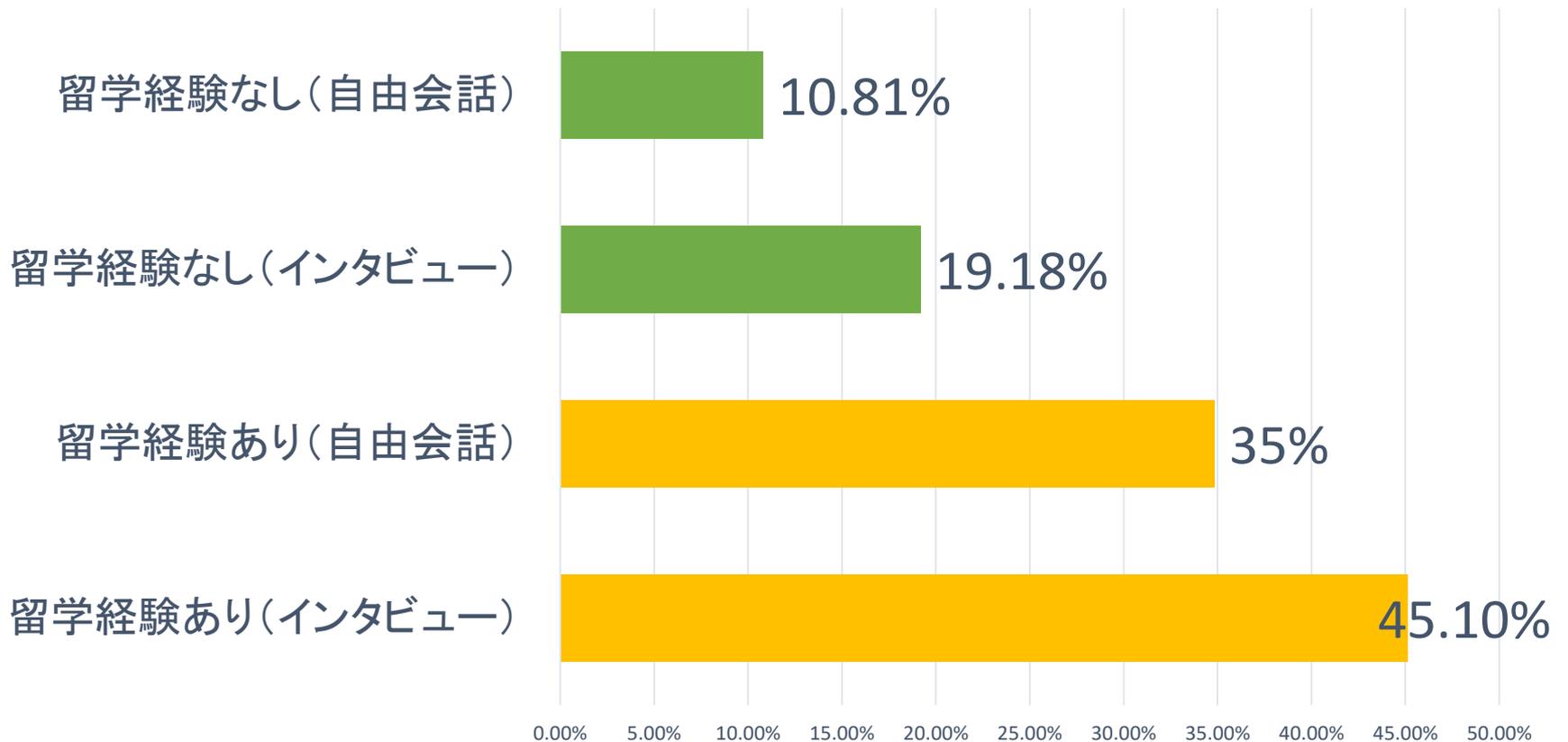
formalとinformalのコンテクストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。



留学経験の差はformalとinformalの脱落頻度の違いに影響する？

## (2) /1/の脱落

/1/の脱落頻度



## (2) /l/の脱落

- 留学経験があるインフォーマントでより/l/の脱落が起こる。  
⇒母語話者との発話に接する機会が多ければ、社会言語学的特徴に気付きやすい。
- formalとinformalの違いで、脱落の頻度に変化はほとんどない。
- 脱落した形の固定化 (il y a, il faut, ils sont)

### (3) c'est, c'étaitのリエゾン

	c'est	c'était
リエゾン実現	8	3
リエゾンなし	30	27
リエゾン実現率	21.05% (8/38)	10% (3/30)

### (3) c'est, c'étaitのリエゾン

	c'est	c'était
リエゾン実現	8	3
リエゾンなし	30	27
リエゾン実現率	21.05% (8/38)	10% (3/30)

Cf. 教科書の音声コーパス:

c'est + =**100%** (16/16例) (近藤, 2012)

### (3) c'est, c'étaitのリエゾン

- 教科書や授業中に接している発話との違い

⇒学習者にとってリエゾンの実現自体が負担となっている？

リエゾンの場合は、特定の語や統語コンテクストにおいて子音を発音するという特徴があるため、学習者への負担が大きい可能性がある。

# 考察

- フランス語における、neの脱落、/l/の脱落の頻度には、留学経験(もしくは母語話者の自然発話に接する時間)が影響する。
- 先行研究でも指摘されてきたように、発話コンテクストの違い(formal vs informal)が脱落自体に反映されるわけではない。

# 考察

- リエゾンに関しては、c'estの後ではリエゾンの実現率が予想していたよりも低い値が観察された。
- ただし、本コーパスでのコンテクスト自体の数が少ないため、一般化することは難しい。今後、インフォーマントの数を増やして、さらに調査する必要がある。

# Remerciements

本研究は、JSPS科研費16H03442「フランス語、ポルトガル語、日本語、トルコ語の対照中間言語分析」、基盤研究(B)2016-2019 代表者：川口裕司の助成を受けたものです。

# 参考文献

- Dewaele, J-M. (2004). Retention or omission of the ne in advanced French Interlanguage : The variable effect of extralinguistic factors. *Journal of Sociolinguistics*, 8-3, pp. 433-450.
- Dewaele, J-M. & Regan, V. (2002). Maîtriser la norme sociolinguistique en interlangue française : le cas de l'omission variable de ne. *French Language Studies*, 12, pp. 123-148
- Howard, M., Lemée. I. & Regan, V. (2006). The L2 acquisition of phonological variable: the case of /l/ deletion in French. *French Language Studies*, 16, pp. 1-24.
- Lyster, R. (1994). The effect of functional-analytic teaching on aspects of French immersion students' sociolinguistic competence. *Applied Linguistics*, 15, pp. 263-287.
- Detey, S., Kawaguchi, Y. & Kondo, N. (2015). La liaison chez les apprenants japonophones avancés de FLE : étude sur corpus de parole lue et influence de l'expérience linguistique. *Bulletin suisse de linguistique appliquée Vals-Alsa*, 102, pp. 123-145.
- Mallet, G. (2008). *La liaison en français: descriptions et analyses dans le corpus PFC*. Thèse de doctorat: Université Paris Ouest-Nanterre-La Défense.
- 近藤野里(2012).「自然会話と教科書におけるリエゾン —Aixコーパスとフランス語教科書を用いた比較分析」,『外国語教育研究』, 15号, pp. 37-53.
- 杉山香織(2013).「フランス語学習者の発話における使用語彙分析」, 東京外国語大学博士論文